

M-GTAを用いての質的研究の可能性

— 分析結果図作成のプロセスに焦点をあてて —

平山恵美子*・岩月すみ江・上 條 育代・尾 曾 直美・西 村 理 恵・上 田 薫 子

Possibilities for the Use of M-GTA in Qualitative Research

— Assigning a Focus to the Analysis Result Diagram Creation Process —

Emiko HIRAYAMA*, Sumie IWATSUKI, Ikuyo KAMIJO, Naomi OSO,
Rie NISHIMURA and Kuniko UEDA

Abstract : The researchers planned a qualitative study and selected M-GTA for the method. During the processes of creating a results diagram and distinctive coding using an analysis worksheet, we were able to gain a perspective for the possibilities in qualitative research using M-GTA. The important point in qualitative research is not grasping the explanations of our collaborators in a superficial manner, but to read deeply into it and face it with an empathetic stance. Furthermore, in M-GTA, continually increasing the imaginative power of the researchers in the process of creating a results diagram, going deeper into the world the informants experience, and gaining an understanding in line with the realization of the situation and thoughts the informants are put in are all important.

Through studies done with M-GTA, we can also realize that (1), it is possible to code concisely in order to include and proceed with tasks like axial coding and open coding in analysis worksheets, and (2) it is possible to understand deeply the overall picture of the informants that we have not been able to see just with the concept.

Henceforth, assuring the validity of analysis in order to gain high reliability as scientific research for research using qualitative methodology, including M-GTA, is important, and researchers are required to develop an attitude that focuses on actions that read meanings behind the context, and links it to "deep understanding." It is also thought that it is important to report in detail the analysis process and not just the analytic procedure and results.

Key words : 質的研究 (qualitative research), 分析結果図 (analysis result diagram), M-GTA (Modified Grounded Theory Approach), 研究プロセス (research process), グラウンデッド・セオリー・アプローチ (grounded theory approach)

はじめに：質的研究におけるM-GTAの特徴
近年、質的研究についての関心が保健、医療、福祉、教育の領域を中心に高まりを見せている。

木下は今日の質的研究の趨勢について「高度な量的分析法を駆使しても現実の問題や現象を説明するのに不十分であるという限界認識や錯綜する社会的現実の中に置かれた人間

の複雑さ、あるいは生き生きとした何かがあるはずなのに量的分析法では捉えきれないというリアリティ感の乏しさが実感されてきたことが質的研究への関心へと繋がっている¹⁾と述べている。つまり現実の問題解決や人間理解の希求性から新しい可能性として質的研究に関心が向けられているといえる。

質的研究は従来の量的研究とは異なり非数量的・言語的データを解釈し、記述的分析を行うものであるが、現段階において研究者間の質的研究の捉えは一様であるとは言い難い²⁾。その研究視座は個人史的なEthnography³⁾、経験の意味を記述するPhenomenology⁴⁾から、結果の一般化を目指したGrounded Theory Approach^{5,6)}まで複数あり、またその手法も様々である⁷⁾。

研究者らが行った『地方病院に勤務する中堅看護師の看護観』は、中堅といわれる立場にある看護師の数値では十分に表現できない情動や言動の意味を分析し、現在看護をどのように捉え、看護師としてどのような在り方であるのかを明らかにしようと試みたものである⁸⁾。長野県南部の4つの施設に勤務する看護師に協力を得てインタビューを行ったが、それは単に研究協力者（以後協力者と記す）の実態を把握するにとどまらず、協力者と同様の立場にある中堅看護師の看護観やその在り方を明確にすることであった。そのため、研究手法はマクロ研究であるGrounded Theory Approachが選択され、その中でも分析手順が簡便・明確で理論生成志向性が高く、grounded-on-dataの原則を貫き、データを切片化せず深い解釈が可能なModified Ground Theory Approach (M-GTA)⁹⁻¹²⁾を採用した。特にコーディング方法においてM-GTAは特徴的であるといえる。コーディングとは単にデータの分類だけでなく、データの深い解釈をも意味している。

木下は、コーディングの鉄則は「coding & retrieval、コードとデータの対応関係の

確保である。つまり、データを解釈してコード化した時にコードの元になったデータが何であるのかが迎れるようにしておくこと¹³⁾と述べている。一般的コーディングは、生データと呼ばれる素材から分析テーマに照らし合わせてオリジナルデータを抽出し、次に一次コードの生成、さらに、コード間の関係を見ながら二次コード、三次コードと抽象化を図り、包括的に分析結果をまとめていく手法である。一次コードはオリジナルデータに直接基づいているためgrounded-on-dataであるが、二次コード、三次コードになるとデータとは間接的な繋がりとなり厳密には直結しているとは言い難い。

一般的コーディングとは異なり、M-GTAは独自のコーディング方法を採用している。コードはなく、他のGrounded Theory Approachで用いている様々なコーディングの形式も用いない。重要な点はデータを単に字面ではなく、その奥にある意味を読み取りながら多角的に検討し、思考を言語化することにある。そして、解釈した結果はすべて概念とよび、これを分析の最小単位と捉える。ワークシートを用いた概念生成の他は基本的にカテゴリーが存在するだけである。解釈によって生成された概念は常にデータと直接対応関係の確認が出来るようになっているため、厳密なcoding & retrievalとgrounded-on-dataの確保をすることができる。概念を生成していくと相互の関連性が見えはじめ、複数の概念がまとまりカテゴリーが生成される。こうして自ずと結果図が出来始め、変化や動きを捉えることができ、全体的に説明力・説得力のある結果が得られていく（分析方法の詳細は飯田女子短期大学紀要第24集に掲載）。つまり、結果図を描くということは研究を総括するための重要な作業で、最終局面に差し掛かっているということである。これまで述べてきたプロセスを経てテーマを明確に表わすダイナミックな結果図が描画され

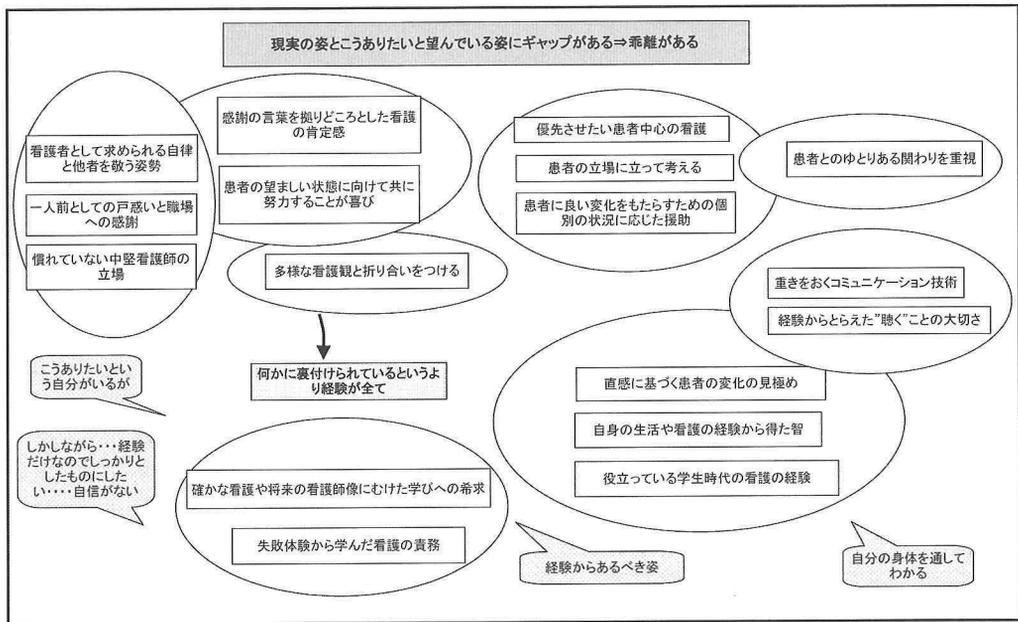


図1 テイク1の結果図

ていくのであるが、単に分かりやすさやイメージをなんとはいはなしに伝えるような図にならないようにするためには、幾度も結果図を検討する必要があった。この作業を行ううちに、結果図が次第に洗練されてきた。以下に、結果図作成のプロセスを述べていく。

1. 結果図作成のプロセス

『地方病院に勤務する中堅看護師の看護観』の研究においては、中堅看護師の看護観の全体像に辿り着くまでに結果図の修正は9回行われた。その修正過程の中での特徴的な結果図を用いて分析プロセスを提示する。

最初に、分析を通して生成された概念を見渡し、概念間の関係を考え、結果図作成に取りかかった。

テイク1(図1参照)は、概念分析終了後、はじめて作成した結果図である。17の概念を、中堅看護師である協力者の視点に立って意味を読み取りながら、類似したものをまとめていった。その概念同士の意味を概観し、協力者の置かれている状況として、「経験がすべ

てであり、あるべき姿やこうありたいという自分を思い描いているが、経験だけなので確固とした自信がもてない状況にいるのではないかと解釈した。その解釈を、結果図に吹き出しを用いて表現した。この分析プロセスを通して研究協力者の現実の姿とこうありたいと望んでいる姿にギャップがあるという状況が浮かび上がってきた。断片的ではあるが、中堅看護師としての協力者の置かれている状況が少しずつ見え始めた。

テイク2(図2参照)では、協力者の理解をより深めるために、“こうありたいと望んでいる姿”を「理想とする姿」とし、その対極に「現実の姿」を配置してみた。個々の概念や概念同士の関係の一つずつ検討しながら、カテゴリー化を目指していった。この段階においては、協力者が「ゆらぎの中におかれている」状況が窺え、さらに、『地方病院に勤務する中堅看護師の看護観』の研究におけるコア概念であった「まだまだな自分」の前段階である「中堅としての責任を果たそうとしている」という姿も吹き出しという表現

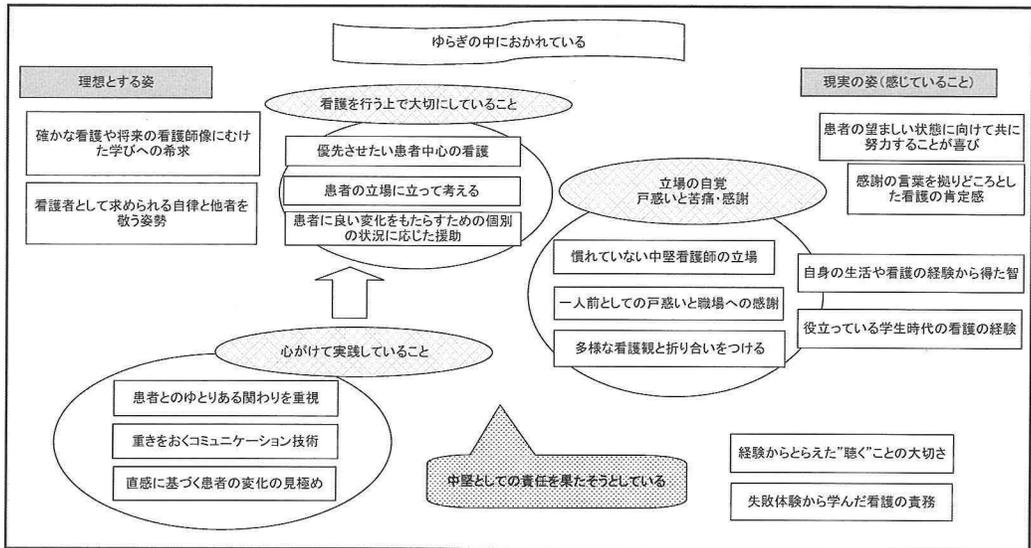


図2 テイク2の結果図

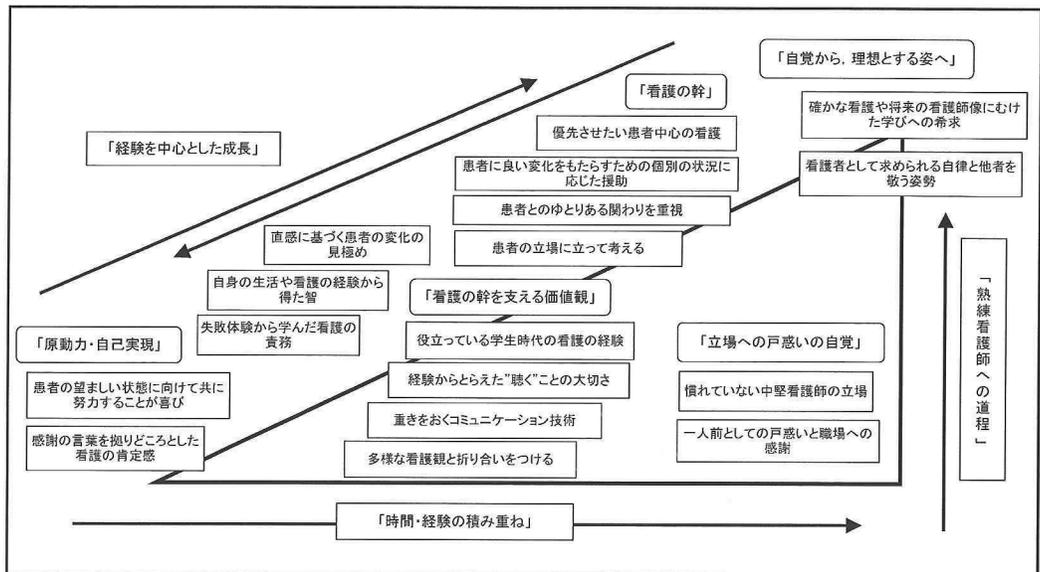


図3 テイク4の結果図

で見えはじめていた。しかし、この分析手順を繰り返すうちに協力者は自己肯定感が低く義務感が強いという研究者らの一方向的な見方が固定し、協力者の理解を深めたり、捉えを広げたりするためのアイデアの創起が生まれにくくなっていった。そのため先見性を排

除するよう努めながら、協力者を多様な角度から見つめ直す作業を繰り返して行った。その結果、看護師の成長プロセスには必ず時間が必要なのではないかという考えが生まれた。

テイク4 (図3参照) では、横軸には時間の流れ、縦軸には熟練看護師への道程をイ

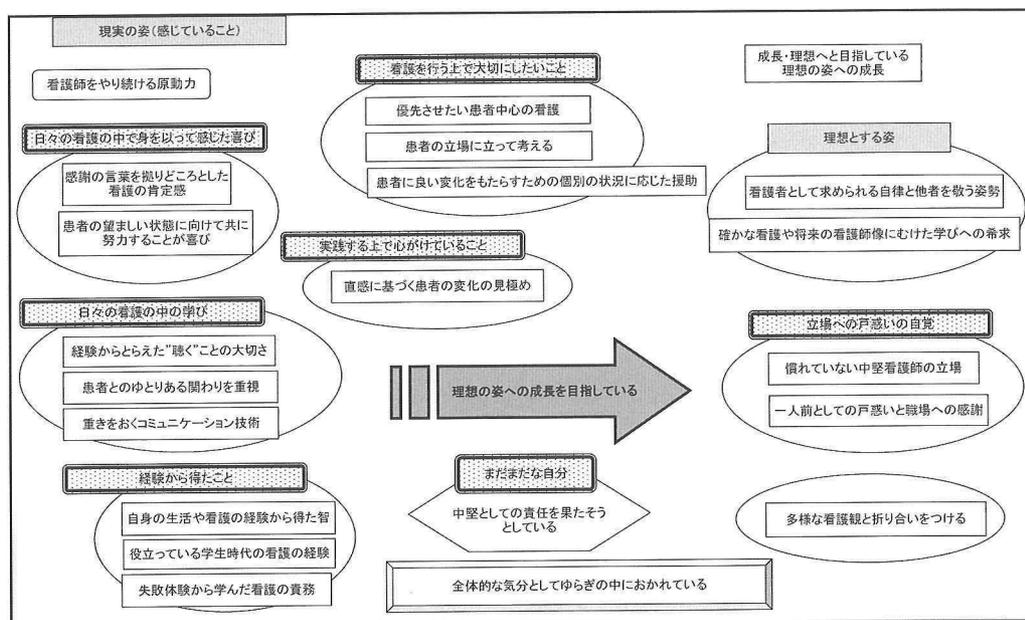


図4 テイク5の結果図

イメージした結果図を描画した。作成した図からは、単なる看護の経験や時間の積み重ねだけでは、熟練看護師には向かえないことが視覚を通して理解できた。しかし、概念間の関係が直線的であり、結果図の目的である[カテゴリーと概念の相互関係を作成することからは遠のいていることやテイク2で得られた協力者の常に“ゆらいでいる”ということが直線的にしか表現できていなかった。これは研究者の視点で概念を整理・分類したものと自省し、再度研究者が持っている見方は「カッコ」でくくり、協力者の立場から意味を読み取ること¹⁾に意識を集中した。検討を重ねた結果、協力者の置かれているゆらぎの中には、アンビバレンツ(両価性)な面があり、それは協力者が置かれている中心的な概念ではないのかという解釈が生まれ、新たな結果図作成となった。

テイク5(図4参照)は、協力者を“全体的な気分としてゆらぎの中におかれている”と位置づけ、まとまった概念同士の相互の関連性を検討したものである。協力者は、「中

堅としての責任を果たそうとしている」がゆえに『まだまだな自分』を自覚し、この『まだまだな自分』が最も中心的な自身の理解を成していることが浮かび上がってきた。同時に、この『まだまだな自分』が、ある時は前向きな自己評価を抱き、またある時は後ろ向きの自己評価を抱きながら、自らが描く看護師の理想とする姿に気持ちが向かうプロセスをも持ち合わせている状況にあると解釈した。しかし、まとまった概念間の動的な位置関係を捉えたものとはなっていなかった。

そこで、定位することのないアンビバレンツな自己評価のさまを水平位の実線の∞(無限大)の軌跡として表現し、基軸に『まだまだな自分』を据えたのがテイク9(図5参照)である。協力者の気分のゆらぎの基となっている『まだまだな自分』を協力者が置かれている中心的な概念と捉え、ポジティブな自己評価のサイクルとネガティブな自己評価のサイクルとの間にゆれ動く現実の自分を両矢印で表し、ポジティブな『まだまだな自分』から自身が描く看護師の理想とする姿に気持ち

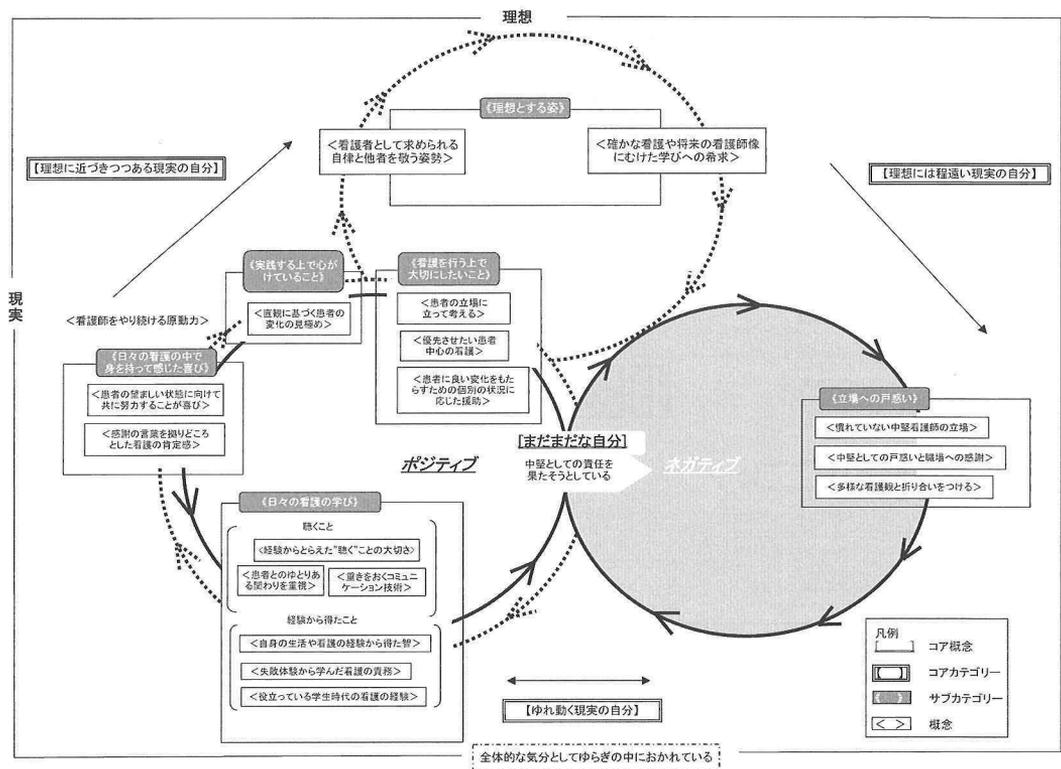


図5 テイク9の結果図⁸⁾

が向かうプロセスを点線の∞（無限大）の軌跡として表現した。さらに、ポジティブな『まだまだな自分』から〈理想に近づきつつある現実の自分〉を右上がりの矢印で示し、能力不十分な自分を自覚するネガティブな『まだまだな自分』を表現している〈理想にはほど遠い現実の自分〉を右下がり矢印として位置づけた。

以上の分析過程を通して中堅看護師である協力者が、看護師としての理想と自身の現実の狭間で全体的な気分としてゆらぎの中に置かれていながらも、中堅としての責任を果たそうとしている姿を描き出すことができた。

2. M-GTAの分析を終えて

本研究に携ったメンバーは全員が質的研究の経験者であったが、M-GTAに関しては1人を除き未経験であった。そのためまずは

M-GTAの学習や現象学的面接法の演習などを行い研究者らの知識・技量の統一を図り、その後研究に着手した。しかしインタビュー後の逐語録を用いての分析が始まると2つの大きな関門に遭遇した。

一つ目は協力者の考えや状況、出来事、行為などを協力者の観点からその言葉の奥にある深い意味を読み取るように解釈していくことであった。理解しているつもりであってもしばしば研究者や外部者の観点から客観化した分析に陥っていることがあり、その都度研究者ら全員で分析テーマに立ち戻り、何を明らかにしたい研究であったのかと自問自答を繰り返しながら、分析を進めていった。その過程の中でデータの抽象化だけでなく、データの意味を解釈していくことが大事であることを実感した。

二つ目の関門は、本稿の主題ともなってい

る結果図を描くことであった。概念の生成まで分析を終えると、カテゴリーのようなものが見え始めたため、簡単に描けるものと考えていた。しかし、動きを捉えるためにはそれまで以上に文脈を深く読み取ることや共感的態度が求められた。そして、常に研究者らの想像力を高め協力者の体験している世界にひたる努力を強いられた。このような結果図作成のプロセスの中で、分析ワークシート上の概念だけでは見えてこなかった協力者の置かれている状況や思いを、少しずつ研究者らも実感を伴った理解として持つことができるようになった。そして、ほぼ確からしい結果図が作成された頃には、研究者全員が参加者の観点、外部者の観点と立場の変換がスムーズにできるようになっていた。

今回の研究を通して実感したM-GTAの利点は、①「オリジナル版グラウンデッド・セオリー・アプローチの軸足コーディングやオープンコーディング等の作業を分析ワークシートで包括して進められるため簡便にコーディングできる」、②「結果図を描くことで、概念だけでは見えてこなかった協力者の全体像を深く理解することが可能となる」ことであった。

一方、研究の厳密性という観点からは、対象者が限定されていたため理論的飽和化に至らなかったことや研究者らのM-GTA習熟度が十分ではなかったため継続的比較分析における追加段階的なデータ収集の不足、ワークシートの定義付けの優先度などに改善の余地があると考えられた。

3. M-GTAを用いた質的研究の可能性

質的研究は、その手法としての内容が理解しにくいことや科学研究としての信頼性が低いという誤解から、まだ医学・医療分野では十分に認められているとは言い難い。質的研究への批判として「選択的にデータを抜き出した主観的なもの」「信頼性の担保」¹⁴⁾等が

取りざたされることが多く、過去に発表された研究の中には、深い意味の解釈よりも手順と技法の形式やコード・カテゴリー等の抽象化に力を注いでいるものも少なくない。しかし、どのような種類の質的研究であっても分析の中心は文脈の意味の解釈である。十分にその意味を検討しないまま簡単に抽象化を進めることは上滑りの浅い解釈を引き起こしてしまい、本来の目的である主観的真理を得ることは困難となる。量的研究の観点からの評価の視点ではなく、質的研究の観点からの妥当性の確保が重要であろう。そのためには先ず、本稿において報告したように【研究する側の人間】が、対象となる人から語られた表面的な言葉ではなく、文脈からその奥にある意味を読み取る行為に傾注し〈深い解釈〉へとつなげていく努力が重要である。また、質的研究に向けられている疑義の一つとして主観性が挙げられており、その観点からも分析プロセスに関する明示は不可欠といえる。

医学や看護学、教育学、社会学、心理学など様々な異分野の研究者によって構成されているM-GTA研究会においては、M-GTAという手法に適した評価基準として、①報告された理論と現実との対応関係、②概念とデータとの対応関係、③基礎的評価（何を明らかにしようとしたのか、学問的意義）、④総合的評価（全体的説明力、説得力）、⑤分析プロセスの開示などを挙げている¹⁵⁾。質的研究の「質」を如何に向上させ、成熟させていくかが課題といえる。

注

- 1) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践，弘文堂，東京，2003. pp. 62-63.
- 2) 瀬畑克之，他：質的研究の背景と課題—研究手法としての妥当性をめぐって—，日本公衆衛生学会誌，48(5)，339-343，2001.

- 3) エマーソン, R. (佐藤郁哉訳) : 方法としてのフィールドノート—現地取材から物語作成まで, 新曜社, 東京, 1998, pp.355-429.
- 4) ベナー, P. (難波卓志訳) : 現象学的人間論と看護, 医学書院, 東京, pp.vii-xvi, 1999.
- 5) グレイザー, B. G., ストラウス, A. L. (後藤隆訳) : データ対話型理論の発見, 新曜社, 東京, 1996, pp.145-167.
- 6) グレイザー, B. G., ストラウス, A. L. (木下康仁訳) : 死のアウエアネス理論と看護—死の認識と終末期ケア, 医学書院, 東京, pp. 1-26, 1988.
- 7) ウヴェ・フリック (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子訳) : 質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論, 春秋社, 東京, 2002, pp. 3-19.
- 8) 平山恵美子, 他 : 地方病院における中堅看護師の看護観に関する研究. 飯田女子短期大学紀要, 24, 37-51, 2007.
- 9) 前掲, グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践, pp.89-91.
- 10) 木下康仁 : 分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ, 弘文堂, 東京, 2005. pp.16-22.
- 11) 同上, 183-214.
- 12) 木下康仁 : ライブ講義M-GTA実践的質的研究法, 弘文堂, 東京, 2007, pp.15-68.
- 13) 前掲, グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践, pp.148-149.
- 14) 前掲, 質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論, pp.271-294.
- 15) M-GTA研究会 木下康仁講演録, 東京, 立教大学, 2006年7月29日.